

特別展「植物誌をつくろう! ~『神奈川県植物誌2018』の できるまでとこれから~」の見どころ+α

おおにし わたる
大西 亘(学芸員)

開催中の特別展「植物誌をつくろう! ~『神奈川県植物誌2018』のできるまでとこれから~」には、おかげさまで多くの方に足をお運びいただいています。この記事では、特別展の展示内容を追いながら、見どころと、展示では紹介しきれなかった内容やエピソードを簡単に紹介します。なお、特別展でも紹介している『神奈川県植物誌2018』までの調査でわかったことについては、一部を自然科学のとびら 第24巻2号に『神奈川県植物誌2018』~40年間の植物誌調査の成果~として田中徳久学芸員が記事を書いています。本記事や特別展図録とともにぜひご覧下さい。

“植物誌”はみどりの戸籍簿

「植物誌」とは、ある地域の植物の一覧と構成をまとめた本で、「みどりの戸籍簿」とも言われます。『神奈川県植物誌2018』は神奈川県を対象とした植物誌で、神奈川県に自生する全ての維管束植物、約3,200種を対象としています。県内10以上の博物館等の標本収蔵施設に収められた約50万点のさく葉(押し葉)標本に基づいてまとめられている点は、国内他地域の植物誌にはない顕著な特徴です。

神奈川県の植物標本は17世紀から!

1691~92年に日本を訪れたケンペル(E. A. Kaempfer)は、国内で最も古い

時期のさく葉標本の採集者です。ケンペルは当時ハコネグサと呼ばれたハコネシダの標本を採集しており、現在はロンドンの自然史博物館(NHM: Natural History Museum)に収蔵されています。このハコネシダの標本が、神奈川県で採集された最も古い植物標本と考えられます。

国内の採集標本数トップは神奈川県?

神奈川県は、全国的に見ても採集・蓄積された植物標本の量が群を抜いている地域です。17世紀末のケンペルに始まり、18世紀後半のツェンペリー(C. P. Thunberg)、19世紀のシーボルト(P. F. von Siebold)、サヴァチエ(P. A. L. Savatier)、マキシモヴィッチ(C. J. Maximowicz)といった外国人が採集したものを基礎とし、明治期以降は牧野富太郎をはじめとする植物研究者や、地域の植物愛好家団体である横浜植物会やそのメンバーによるもの、あるいは県内各地の植物研究者たちによるコレクションが数多く蓄積され、国内でも植物標本の蓄積の層が厚い地域です。全国の自然史系博物館の標本情報が登録されているS-Net(サイエンスミュージアムネット)によれば、全国の博物館で収蔵されている植物標本を採集された都道府県別に見ると、神奈川県は約24万点と、2位の岡山県(約10万点)以下を引き離しています(図1)。ただし、S-Netで公開されている標本は、

博物館に収められている標本のすべてではありません。例えば、神奈川県でも『神奈川県植物誌2018』で参照されている標本数は約50万点ですが、S-Netで公開されている標本数はその半分程度です。こうした標本を整理し、情報を公開していくことは、博物館に今後求められていることの一つでしょう。

もう見られない神奈川の植物たち

古くから標本が採集されている神奈川県では、現在生育が見られない植物たちにも標本の形で出会うことができます。その多くは、土地改変で生育地が消失したものです。こうした植物の多くは、それぞれが適した環境に特殊化しており、残された標本から過去の植物の生育が明らかになることによって、生育に適した環境が当時の神奈川県にはあったことも同時に知ることができます。19世紀の終わりから20世紀初頭にかけての横浜市西区平沼付近では、海水の入り混じる泥質~砂泥質に生育するシバナが採集されています(図2)、現在の神奈川県では、シバナの生育に適した環境はほとんど残されていません。平沼のシバナ生育地が埋め立てによって失われていく当時の状況は、植物学者牧野富太郎も報告しています(牧野富太郎 1917 植物研究雑誌 1:154)。

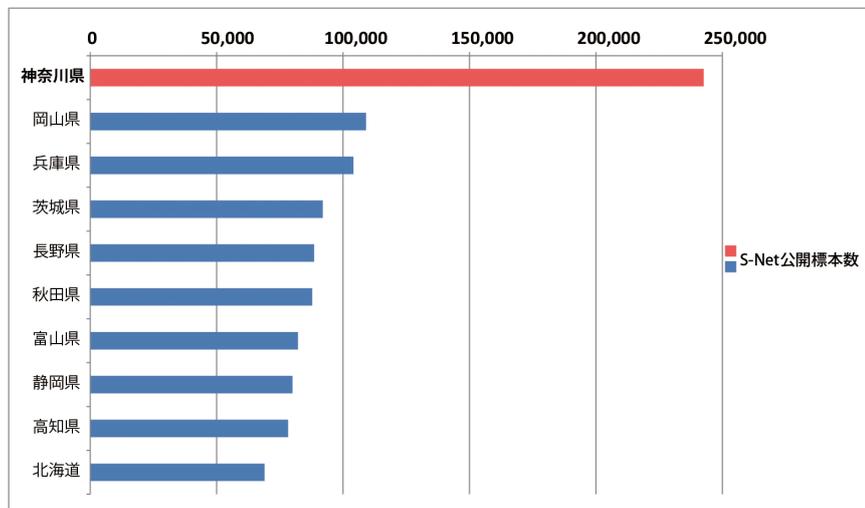


図1. 採集された都道府県別に見たS-Netでの公開標本数(上位10都道府県。データは2018年8月1日に参照した)。神奈川県で採集された標本数は、群を抜いて多いことがわかります。

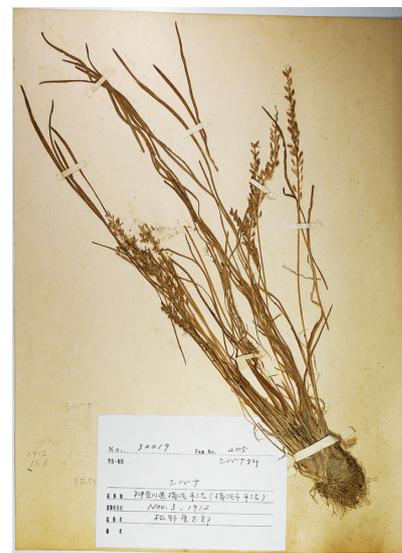


図2. 横浜市平沼で採集されたシバナ(1912年11月3日 松野重太郎 ACM30019)。

杉田のスギ、最後の一本

横浜市磯子区杉田にある東漸寺^{とうぜんじ}の境内に、1943年までスギの大木が生育していました。このスギを輪切りにした材標本(図3)を調べてみると、年輪から、どうやら16世紀の末ごろに芽生えたものであることが分かります。歴史資料によると、16世紀には杉田付近は大きなスギが林立するスギ材の生産地であったそうです。材標本として残された大木は、杉田にスギがたくさん生育していた頃の最後の生き残りだったのでしょうか。今は見られない地域の植物や景観の証拠として、標本は生き続けます。

展示では、1987年の旧神奈川県立博物館での特別展を前にして書かれた、杉田のスギに関する神奈川新聞の記事も紹介しています。

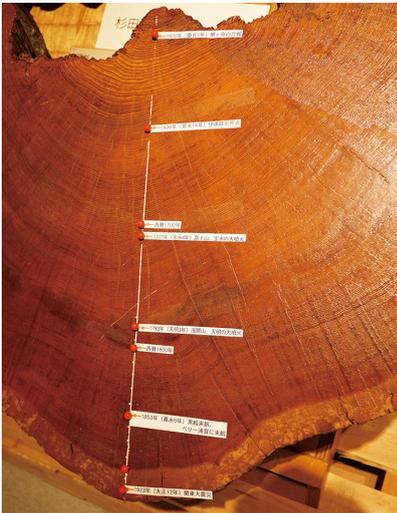


図3. 最後の杉田のスギに刻まれた年輪と歴史年代の対比 (KPM-NA0301898)。

『神奈川県植物誌2018』のルーツは40年前!

『神奈川県植物誌2018』は、神奈川県の新しい植物誌をつくるために1979年に結成された市民グループ「神奈川県植物誌調査会」によって編さん・刊行されています。約40年前の設立時に掲げられた「神奈川県植物誌編さん事業計画」(図4)には、当時すでに『神奈川県

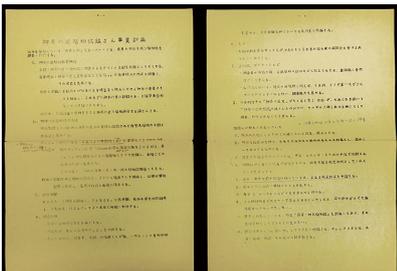


図4. 「神奈川県植物誌編さん事業計画」(1979)。



図5. 特別展の『神奈川県植物誌2018』でわかったことのコーナー。写真と標本で新事実を紹介しています。

植物誌2018』で目指した調査方針や調査員向けの勉強会の実施、植物誌としてまとめた際に掲載すべき内容などが挙げられており、設立当時のメンバーの先見の明と、それが実現されたことに驚かされます。例えば、当時はまだパーソナルコンピューターの黎明期^{れいめいき}で、現在とは比べ物にならないほど性能に限られており、データベースでは、3,000種程度のそれぞれの植物種が県内108の調査区にある/ないというデータを扱うのが限度でした。今では、50万点近くの標本1点1点について、植物名の情報、いつ、どこで、誰が採集したのか、収蔵博物館の情報など、膨大なデータを取り扱っていることを考えてみれば、驚きの話です。また、同会による最初の植物誌『神奈川県植物誌1988』の編さん過程では、ようやく普及し始めたワープロ、パソコン、活字プリンターなどを会員有志が私費をはたいて購入し、それらを駆使して原稿の執筆や版下作製を行ったそうです。植物誌の調査だけでなく、執筆・分布図の作成に至るまで、未来を見据えて当時の最先端を進む作業を行っていたことが伺い知れます。

これからの『神奈川県植物誌』

『神奈川県植物誌2018』に至る過程では、刊行された「植物誌」だけでなく、様々なものがもたらされました。神奈川県産の50万点近くの植物標本が把握されたこと、県内各地域の調査の拠点となり、標本の集積・公開を実施できる県

内10以上の博物館・施設のネットワークが構築されたこと、植物誌の調査・編さんを通じて技術と知識を獲得した神奈川県植物誌調査会の会員が、様々な形で地域の植物の情報を社会に発信していること、などが挙げられます。いずれも短期間に実現できることではなく、40年近くの活動の継続があつてこそ、と言えます。こうした得難い状況を継承し、さらなる発展を目指すことがこれからの『神奈川県植物誌』の一つの方向性と言えるでしょう。

同時に、広く世界中で、また300年以上の長期にわたって、植物分類学における証拠として認められてきた植物さく葉標本の集積と検証を基礎としつつも、今後は時代や状況に応じた形で様々な形態の証拠を積み重ねながら、地域の植物相を記録し続ける必要があると考えています。

以上、簡単でしたが、特別展「植物誌をつくろう!〜『神奈川県植物誌2018』のできるまでとこれから〜」の見どころ紹介でした。

なお、特別展のうち、直接ご覧いただきたい展示は本稿では割愛しました(図5)。ぜひ特別展もしくは特別展図録と併せてご覧下さい。また、今回の特別展に続いて、植物誌の調査に参加した県内の博物館や関連施設等で『神奈川県植物誌2018』関連展示を2020年ごろにかけて順次開催する予定です。各博物館・施設とも、それぞれにオリジナルの内容を盛り込んだ展示となる予定なので、どうぞお楽しみに。